

1985年国連事務総長年次報告

ハビエル・ペレス・デクエヤル



国際連合

1985年国連事務総長年次報告

今日われわれは、ほとんど無限ともいえる可能性を秘めた世界に住むとともに、反面、まかり間違えば人類が絶滅しかねない危険な世界にも住んでいる。この二つの世界のいずれを選ぶかは、われわれ自身の手に委ねられている。問題は、各国政府と世界の人々が、これ以上人類に災禍をもたらすことなく 相協力して正しい選択を行うことができるかどうかである。というのも、この選択をし、実施していく際、多くの重要な点で集団行為をとるほかはないからである。この歴史的選択において、国際連合の加盟国がこの機構をどう利用するかが、現在もそして将来も本質的に重要なことだと私は考える。それ故に、国際連合40周年に当たる今回の年次報告で扱う問題は、国際連合の将来そのものではなく、人類とこの地球の未来ならびにその未来における国際連合の役割についてである。

今日われわれが直面している世界は、40年前に国連憲章をつくり上げた政治家たちを驚かすに十分である。この40年間に世界地図、世界を理解するための科学、国際関係、戦争の性質、そして生活の仕方に大きな根本的な変化が生じた。この変化に対応するために、すべての人が何らかの方法で、新しい道標やすぐれた制度、有効な対処法を探し求めているのである。

われわれは今、流動的で不確かな時代に生きている。それは、新たな紛争とか大規模な人的災害、あるいは計画的暴動などのような絶望的問題が生じた時に特に顕著になる。

全世界を見渡すと、一方では大国の大量かつ高性能な核兵器が存在し、またもう一方には、不遇にうちひしがれ、住む土地もない人々の絶望が存在するのを見ると、その二つの世界の間には、法の論理も信頼に足る権威も認められない空白がしばしば存在するということは、否定のしようのない事実である。それだけにわれわれの最大の急務は、すべての人々が参加する機能的な国際政治制度を築き上げる決然たる努力を通して、この空白を埋めることである。その制度は、単に生活と秩序を保証するだけでなく、地球上の住民全部の利益をより公平にする世界をつくり出すものでなければならない。

今日の世界では、その実体がいまひとつ定かでない国際権威というものを検討することが重要である。国際連盟及びそのあとに続く国際連合の設立以前には、国際関係を制する唯一のものは、最強の国家ないしは帝国が持つ力であった。今世紀二つの世界大戦をひき起こしたのは、主としてこの力の乱用であった。国際連合が設立されたのは、このような実態を変えるためである。クリミヤ会議の後でルーズベルト大統領はこう述べた。国際連合の設立によって、「何百年もの間試みられ、ついぞ成功しなかった一国主義、閉鎖的同盟、覇権主義、力の対決、その他すべての政略は終えんする、いや終えんさせなければならない」と。

だがその後の状況はそのような世界にはほど遠いものである。二つの世界大戦と、過去40年の大きな変化は、世界が元来た道に戻ることはできないことを示し、かつ国連憲章に描かれた体制が今日の時代状況の中で、国際の平和と安全を維持し、経済的発展と社会的進歩を共に促進するにはどうすべきかを示す回答の一つである、ということを明らかに示している。しかし事實は、これまでわれわれは、政治的問題を克服出来ず、しかもとくにこの嵩高な国際的体制をすべての人のために機能させるのに不可欠な最強国間の協力関係を樹立することに失敗しているということである。

この点は、テロの問題を扱う際の難しさによくあらわれている。この問題を論ずる時、多くの人々はまるで国際条約が存在しないときめてかかっているようである。だが私はここで国際民間航空機関管轄の下に採択された三つの条約と1979年に国連総会が採択した国際人質防止条約の存在を指

摘しておきたい。これらは、少なくともハイジャックと人質をとること
に対して、相当有効な行動をとるための法的枠組みを提供している。困難
が生じるのは、具体的な事件に対して、各国政府がこれらの条約を適用し
たり、その適用意思を見せないためである。ここでもまた、これら国際条
約を機能させるのに不可欠な政治的条件や連帯の意識および相互信頼の大
幅な欠如がみられるのである。

ところがそのような条件をつくり出し、国際的連帯をかん養する最上の
場所が、国際連合なのである。事実、それこそが国連の本来の主目的の一
つなのである。諸国家間の関係においてほんのわずかでも前向きな関係が
存在する時に初めて、国際権威というものが、人間社会において正当に位
置づけられるようになるのである。

☆ ☆ ☆

国際連合は、国際社会のすべての問題を解決することはできないし、ま
たそのようにつくられてもいない。が、最悪の事態を回避し、改善の努力
をするには最良の機構である。そして国連は、実際、一般に考えられてい
るよりもはるかにましなスタートを切った。この事実を簡単に説明してみ
たい。

40年後の今日、われわれは史上初めて、独立した主権国家から成る世界
を築いた。1945年以来起きた紛争は決して少なくなかったが、これまでのと
ころ、われわれは第三次世界大戦を回避し、そしてその終末論的な災厄を
回避する方法や手段について、恐らく考えられる以上に多くのことを学ん
できた。われわれは今、新たに生じた地球的課題に対応しようと、集团的
努力を行っているが、その課題の多くは、ただ利用するだけでなく、地球
とその資源を保護する必要から生じている。人道的問題に対しては、それ
が世界のどの地域で起きようとも、ますます大きな国際的反応が生じるよ
うになっている。まだまだ侵害は絶えないが故に、人権擁護は広く世界の
関心事になってきている。過去40年間に、これに先立つ歴史全体における
より多数の国際法が制定され、実質的にほとんど全領域の人間活動を支
配するに至っている。その多くは国連総会の下で制定された。

世界は依然、明らかに、不完全にして不安定、不公平にして危険であり、

またあまりにも多くの地域で、貧困が広がっているが、上述したような実績において、また他の分野においても、より良き世界を築く基盤は出来ている。この基盤の上に、有用で、一貫性ある、有効な制度を築くために協力し合うことを各国政府が望むか、あるいは各々が近視眼的で利己的な立場から短期的にはより楽な選択をするか、その決定をするのは各国政府である。もし後者を選択すれば、困難な作業の末創設されたこの将来性ある基盤も、ただただ空論のまかり通る場となり果て、次から次と新しい災難、厄禍を培養する土壌となるだろう。前者を選択するのが正しい道であることはいうまでもない。

☆ ☆ ☆

国際連合を不可欠の機関としている二つの基本的機能がある。第一の機能は、集団的努力によって緊急事態に対処し、現今の問題を扱うことができるような手段となることである。これらの問題というのは、国際紛争、諸国家間の論争から何百万人もの人々に影響する人道的な救済を要する緊急事態、突発的な経済社会危機などにわたっている。

第二の機能は、より長期的な性格のもので、われわれの世界が置かれている政治的、経済的発展の複雑な諸相に関係している。歴史を通じて家族から部族へ、町へ、市へ、州へ、民族国家へと、小さい集団から大きい集団へと、自然に広がる政治的発展があった。この発展は、経済生活が複雑さを増し、分業化し、相互依存的になるにつれて多かれ少なかれ自然発生的に、時に応じて各地で生まれた。このようにして今日われわれは、ほとんど民族国家によっておおいつくされた世界を形成した。独立主権国家は、最大の政治的実体であり、国連を構成する主要単位である。

しかし今日、大きな統一体として初めて有効に対処できるとか、不可欠の安全保障や共通の利益も、主権国家の集団的努力を通してのみ達成できるという問題や現実の場面がいくつもある。これらの問題の中には、共通の利害に結ばれた国々のグループによる地域的な協力によって解決出来るものも多いが、中にはすでに地域の次元を越えてしまっている問題も少なくない。好むと好まざるとにかかわらず、われわれは多くの点で一つに結ばれた世界をつくり出してしまった。このため全人類に影響するいくつか

の主な問題においては、相互依存が世界的に日常事化してしまっている。

それ故、国際連合の基本的役割は将来国際的体制を築くような際、その基盤となるものとして機能することである。この体制というのは、国家主権を十分に認めながらも、現実の問題の中には、国家主権を越えたものを緊急に求めるものもあることを前提とする。

人類の未来を展望しようとする人は誰でも、私が今のべた二つの機能が、生存のためにますます緊急を要するものであり、そればかりか、多分に不可欠のものである、と認めるに違いない。1945年以来、世界人口は倍以上になった。次の15年間には約三分の一増えるものとみられる。この世界に生じる緊張とストレスの一部は、この人口爆発がもとで社会や資源に生じるプレッシャーからくることは疑いない。

しかしわれわれはまた、諸国民の間での要求や大望にかかわる多くの不安定な均衡について思いをいたさねばならない。未来に持ち越される未解決の抗争、この世界での思想、信条、利害にかかわる多くの紛争、生産及び兵器におけるめまぐるしい技術革新の速度、豊かさと極貧との間の格差の拡大、世界中を一つにつなげる経済的つながり、そしてすべての生命が依存する生態系に危害を及ぼす危険の着実な増大等々、数え始めれば際限もない危機の数々を一べつすれば、どれほど複雑な困難が伴おうとも、国際協力は好むと好まざるとにかかわらず、不可欠のものであることが明らかとなる。

しかしながら、今のべたような国際システムを育てるに当たり、もし国際連合がその役割を十分に果たそうとするなら、より機能的な制度にならねばならない。国連憲章に示された主要な責任との関係から、この問題を以下に述べたい。

☆ ☆ ☆

緊急事態に対処し、日々に生じる問題を扱うという国連の第一の基本的機能という点において、国際の平和と安全の維持は、国際連合の第一義的目的である。憲章の起草者たちの心の中では、それは軍備制限と軍縮の推進に密接につながっていた。事実、憲章26条は安全保障理事会に対して軍備規制の制度をつくる主導的役割を与えている。

40年前、第二次世界大戦をひきおこした破局的な時期について、その教訓もいまだ人々の心に生々しかった時、軍備拡張を競い合うことによって国の安全をえようという古い考えは、一般的には安全をより脅かすものであることが認識された。それ故、そのようなやり方は、とくに最強の国々をまきこみ、それらの国々が国連の安全保障理事会で中心的役割を果たすという国際平和と安全の集团的システムにとって代わられることになったのである。その義務の遂行に当たって、安全保障理事会は、必要ならば、メンバーの支持を得た上で、憲章第6章及び7章に規定された全措置を駆使できることになったのである。そのような制度が尊重されるならば、兵器の制限と軍縮は自然に達成されると信じられた。

この高尚で理を得た考え方は実現しなかった。それには多くの現実的かつ政治的な理由があったが、その少なからぬ理由に、安全保障理事会の主要な推進役である常任理事国の一致が得られなかったことが挙げられる。この国際の平和と安全を守る制度の主要前提条件が欠けることによって生じた問題に、国際連合はどのように対処したであろうか。

国際平和という観点からすると何よりも優先すべきは、地球的規模の紛争を回避することであるのは明白である。もちろんそれは核大国自身の主要関心事であるが、すべての国にとっても大きな危険となっている。そのような危険というのは事故、誤認または大国をまきこみ、彼等も回避できないうちに予期しえぬ連鎖反応となっていく事件などである。この最後の状況は、地域的紛争のエスカレーションから生じる可能性が最も高いのである。

この簡単な分析が正しいとすれば、核戦争のぼっ発を確実に防ぐには、各国政府が取り返しのつかぬ決定をしないよう、力に代わる話し合いの時間をつくるような措置をとるなどして、事件の噴出を押しとどめる対策が必要である。そのような手段としてまた、各国政府が対決に向かおうとしている政策変更を可能にするような方式もある。具体的には鎮静化、及び交渉を指しており、それによってたとえ破滅的な紛争が、解決されないとしても、少なくとも封じこめ、拡大を防止することができる。地域紛争の場合、とくに微妙な地区では、紛争管理という形が望ましいこ

とが多い。そして一般的には対立する意見が自由にのべられ、第三者による援助が得られるような中心的な場を設けることは、平和維持のために重要なことである。

安全保障理事会は、これまで幾度も、事件の奔流を押しとどめ、流れを大きく変えるための時間を稼ぎ、当事者の面子を失わせないような解決手法を編み出し、そして暴力に代わる話し合いの場を提供してきた。それは停戦、休戦の実現につとめ、話し合いへの道を開いた。また複雑な問題解決のための重要な指針を示し、事務総長の協力を得てあらゆる形態の和解、調停、斡旋、事実調査、休戦監視、静かなる外交などの機能を提供した。地域紛争を核大国の対決の領域から切り離したことも一度ならずであった。解決することはできなかったとしても、理事会はもっとも危険な問題を持ちこむ場となった。二国間並びに、各国間での努力をうまく組み合わせることも度々行ってきた。それは、野放しの戦争の淵に落ちこまないよう関係国政府が用いる最後の拠り所、いわば落下防止網としての役割を果たしてきた。最後に、憲章第7章が発動されるための政治的条件を欠く現状にあって、今や平和維持機能として知られる一つの紛争管理システムが育まれてきた。それはこれまでに13回展開され、相当な将来性と効果のあることを示している。

歴代事務総長たちは、これらすべての努力に深く関わり、このため平和と安全に関する事務総長の役割は増大してきた。この問題については未来との関連であとでのべてみたい。

変動が激しく、予断の許さない国際環境の中で、その第一義的任務における理事会のこれまでの業績は、普通考えられているよりもはるかに良く、大いに的を得たものであった。もちろんそれが天罰を受けたとはいえ希望に満ちた40年前の世界の期待に達しているわけではなく、憲章が示している幅広い行動を十分かつ有効に展開したというわけではない。しかし、ほとんどは陰悪な政治的条件の中で行動しなければならなかった安全保障理事会としては、平和維持のために武力に代わる解決法を探すという精一杯の努力をしているのである。

現状において国際連合の平和と安全維持機構に多くの弱点と欠点がある

のは否定出来ない。安全保障理事会が一致団結出来ないことが一つである。またこの理事会の決定が尊重されず、それに協力のえられないことも一つである。また危険な状況を先取りし、あるいは予見すらして、問題がまだ扱い易い段階で理事会の力を積極的に利用しようとしないうちに影響されることも多い。いくつかの問題では理事会にアプローチする能力が全く欠けている場合もある。しかし私はこの40年の国際社会の現実の中では、同じ件について書かれた多くのものとは違って、安全保障理事会が安定化と紛争の限定化に不可欠の、多くは中心的役割を果たしてきたと主張したい。

問題は、いかにしてこの役割を高め、憲章に定められた地位に理事会を近づけるかである。常任理事国の関係がどうであろうとも、本来目指していた地位に理事会をひき上げるような変化が生じるとすれば、それは明らかに、極めて望ましい変化といえる。しかし一方では、永年にわたって機能してきた線に沿って、理事会が自らの能力を高めることが必要なことも確かである。

私のこれまでの年次報告の中で、とくに1982年の報告の中で、この点についていくつかの提言をした。ここでそれをくり返すつもりはなく、各国政府がその中のいくつかについては行動する必要があると考えてくれるよう希望するのであるが、40周年という機会に、より簡単にした形で提示してみたい。

第一に 安保理事会のメンバーとりわけ常任理事国は、決然と目的意識の明解な努力をされるよう提案したい。そしてとくに常任理事国はその力を発揮して、安全保障理事会を本来の目的である平和の守護者としての姿により近づけるように努力する一方、討議中の問題に直接関連のない政治的、イデオロギー的相違をめぐる戦い合う場とすることを出来るだけ避ける努力を、決然と意欲的にやっていただきたい。言い換えれば、国際の平和と安全にかかわる事項を、二国間の論争に優先させていただきたいのである。

第二に 安全保障理事会は、憲章で定めている諸手段を存分に生かして、現在抱えている主要問題を一つでも二つでも解決出来るよう、慎重で協調

精神に富んだ努力を始めていただきたい。

第三に 加盟国全体には、憲章上の義務の再確認、とくに武力の不行使
ないし武力による威嚇、紛争の平和的解決、紛争解決について憲章に定め
られた手段の信頼ならびに理事会の決定の尊重といった義務を再確認して
いただきたい。

現在の状況では、このような提言は、ある人々にとっては単純に聞こえる
かも知れない。しかし現在のような核の時代には、国際の平和と安全を守る
集団体制が失敗することほど危険なものはないのである。国際連合は決して
超国家ではない。それは、主権を有する独立国から成る組織である。そ
して国連そのものは、自身の主権を有している。主権は個々の加盟国が放
棄しない限り、その加盟国のものなのである。国連の機能は、そしてそれ
故に事務総長の機能は、調和をはかり、行動を奨励し、対策を提示するこ
とである。しかしそれを実施するのは、つまり推進役となるのは加盟国であ
る。この行動力が得られる時には、国連は顕著な成果を上げられる。私は、
国際平和と安全の維持という国際連合の中心的機能に向けられたこの推進
力、この集団的意志をこの目で確かめたい。来年1986年は国際平和年と定
められている。この年を真剣な反省と行動を求める年としようではないか。

☆ ☆ ☆

生き残りのための集団的決意と、最小限の共通利益は守るという認識がな
ければ、軍縮における意味ある前進はなしえない。国際的な安全のそう失
と新しい領域に拡大するかも知れない恐怖感を伴った軍備競争は、際限の
ない悪循環を生み出している。軍備競争に関する限り、優位を求めるのは
幻想にすぎないことはどれ程強調してもしすぎることはない。核の時代に
おいては軍備競争はすべての人々の命を脅かし、さらに将来の世代の生命
も危うくするのである。

各国政府は、第一歩を踏み出す勇気をもたねばならない。われわれは、
20余年前に部分核実験禁止条約のような進展を導き出したビジョンを呼び
起こさなければならない。今日、核の挑戦に応える人類の意思を明白かつ
決定的に示す方法は、全面的核実験禁止条約に合意することであろう。条
約の採択は、核兵器の止まるところを知らない技術開発を遅らせることに

より、われわれの存在そのものを脅かす連鎖を断ち切るのに役立つであろう。他にも、早急に注目を要する領域として、たとえば非核兵器地帯の設置がある。

潜在的に地球全体を破壊する力の故に、核兵器に対する恐怖感は広くゆきわたっているが日々無数の人々の生命を断っているのは、通常兵器である。兵器貿易にたずさわりの、それをあおり立てている人々の責任は絶大である。さらに通常兵器の軍核競争は、貴重な経済資源を浪費している。われわれは、軍縮と開発との間の相関関係を頭におきつつ、地域的プランを含む各国間軍縮のための実際的措施を推進しなければならない。

大国同士の二国間交渉は、当事国の国民のみならずすべての国の人々の未来にとって明らかに絶対的な重要性をもつ。この関連で、来たるべきソ連とアメリカの指導者の会談は、緊張の緩和並びに軍縮その他の重要事項における進展に寄与するものと、すべての者が大いに期待している。

同時に私は、国際連合が軍縮における前進に貢献することができるし、またそうでなければならないことを強調したい。軍縮会議は、軍備制限と軍縮に関する各国間討議のためのユニークな舞台を提供している。国際連合は、この分野での危険な傾向を抑制する全面的責任を持っている。たとえば、化学兵器抑制に関する責任がそうである。

私は、検証と実施手続きについてこれを助ける国連の能力を、積極的に模索するべきであると考え。国際原子力機関は、核の不拡散のモニターと、核エネルギーの平和利用の確保について独特の経験をもっている。この専門的能力を発展させ、核兵器協定に対するモニター能力にまで高めることができよう。また地震観測所や現地査察あるいは衛星による監視を通して国連が順守を検証すべきことも提案されてきたし、それについて一層考慮がなされるべきである。

☆ ☆ ☆

人類の最も大きな望みのうちの多くは、経済及び社会進歩に関係している。それだけにそれは国際連合の第一義的目標でなければならない。過去40年に大幅な進歩が遂げられたが、世界のいくつかの地域での不景気や不況について、懸念や疑念が広がっている。

相当の期間にわたって世界経済が、不均等で不満足にしか機能してこなかったことは否定できない。工業国では、高度な技術の波がぼう大な富を約束している。それはまた過剰能力と時代遅れ、失業のもととなっている。多くの発展途上国は、開発という基本問題は別として、国際金利の高まりに伴った負債の負担に苦しめられている。しかし、最近調整問題と婉曲にいわれるこれらすべての困難は、世界的調整の大きなプロセスの一部と考えられるが、それが、他国の犠牲において自国の問題を解決しようとする多くの国が保護主義や一方的な替為レート政策をとりがちであるために、一層困難になっている。

1930年代に世界経済を崩壊に至らせたのは、この種の近視眼的経済ナショナリズムによってであった。これこそ、国際連合の設立とともに、通貨、金融、貿易の各領域において専門的な機関を設置しようと大きな努力がされたゆえんである。

国際連合における世界経済問題の審議が、各国の政府部内でこれらの問題に最終的な責任をもつ人々の間で行われたことはほとんどない。大蔵省や中央銀行は、世界銀行や国際通貨基金のような他の国際機関に代表を出す、これらの機関の機能は専ら経済、金融、通貨の審議に限られている。

しかし最近ますます明らかになっているのは、経済、金融、貿易の諸問題はそれぞれ非常に相互に関連し合っており、かつ政治的、社会的に非常に重要であるため、より大きな政治の枠組の中で扱った方が効果的であるということである。国際開発問題の場合は、この点が、新国際経済秩序を求める声とともに、国連貿易開発会議の創設において認識されたが、その他のより大きな問題においても、そのことがいえる。もし実質的にすべての人類に影響する諸問題に対する努力が、適切であり、配慮のゆき届いたものであるべきだとすれば、このような動きは、国際連合のアプローチの中に、そしてまたそこへ送られる政府代表の人達に反映されなければならない。

経済問題における国際的協力の必要性から、国内的には異なった省庁に、そして国際的には異なった専門機関によって代表される伝統的な部門別境界が、ますます取り外されつつある。多くの場合必要なのは、実践的努力

を統合するための話し合いの場として、より効率的かつ実用的に国際連合を活用することである。そうすることによって各専門機関の仕事の重要性が損なわれるということは、断じてない。それどころか、むしろ各機関の効率と適性とがさらにアップされよう。こうした調整的努力は、国家レベルにおいても並行して行われることが必要である。国際的システムが効率的に機能するために、各国政府の省庁が合意した目的に向かって相互に協調することが求められる。

経済社会理事会は、国際的な共同行動のための新たなニーズと機会を探求するうえで有益な機能を果たすべきである。理事国は理事会をもっと効率的に機能させるために、そして事務局は支持の質的拡充をはかるために、努力を払っている。多少の成果はあったものの、理事会が国連憲章で与えられた重大な任務を遂行し、私たちが共に歩むべき方向とその精神とを明確に打ち出すためには、いまだ多くの問題が残されている。

私たちが現在直面している経済的变化は、いかなる国と言えども、一国だけではとても対応出来ない広がりと複雑さを持ったものである。例えば国内の雇用を輸入競争から守ろうとすれば、失業を輸出する結果を招く。明らかに必要なのは、私たちが抱えている問題の地球的規模の性格についてのより幅広い見方と、より柔軟性のある理解の仕方である。こうした見方は、相互依存並びに公平に責務を分担し、他者を思いやることの必要を卒直に認識する立場に基づくものでなければならない。このような制度を確立して得られる結果は、たとえば、資源のより完全な利用やより少ない失業、より大きな経済効率と社会的公正というように、実に大きなものとなる。不幸にして、現在ではこうしたアプローチを一般に容認させることの困難も、また実に大きいと言わざるをえない。

国際的債務状況は特に驚くべきものとなっている。債務国の多くは、いま再び輸出市場の弱体化という問題に直面している。生産物の価格は実質、1930年代以降よりも下がり、さらに下降している。しかし金利の方は依然として高く、新たな貸し付けが行われる傾向はなく、あるのはその逆の傾向だけである。金融機関の貸し付けの枯渇に対応して、多くの債務国は輸入を減らし、生活水準を下げ、開発計画を縮小させているが、それ

は社会的に、また政治的にさえ極めて深刻な結果を招くにいたっている。その上市場を損失することにより、工業国におけるぜい弱な経済競争力の回復を困難にする。

債務危機の解決に対して、先進国と発展途上国の双方に強い関心がある。しかしながらこの債務問題は、足並みの乱れが建設的な方向を目指そうとする努力をいかに妨げているかを示している。負担軽減のために債務支払いをより長期に改定する努力が行われる一方で、その努力を台無しにしてしまう保護主義的措置がとられている。私は、政治的側面も含んだあらゆる角度から、この状況について共同で全面的に速やかな検討を加える必要があると考える。

世界の経済的及び社会的問題についてより良い理解を促進することは、国際連合ならびに他の国際機関の基本的な任務である。この分野においては、いくつかの頼もしい経験がある。過去15年間に国際連合が主催した地球的規模の問題をめぐる一連の会議は、問題に対する知識と意識とを高め、協調的な解決方法を模索するうえで、確かに革新的であった。アフリカ問題に取り組む昨今の国際的努力にも、一連の特別な問題に対して国際社会の技術と資源とを進んで活用していこうという姿勢がうかがえる。

政治面同様に、経済面においても、私たちは国連機関を現実には照らして適切かつ効果的に機能させる必要性に直面している。私たちはますます深くなる経済の相互依存性を運用する術を学ばなければならない。これは途方もなく大きな仕事である。だが、それに失敗すると経済的及び社会的衰退と混乱とを招く結果となりかねないが、その様相と今日という時代での状況からみると、その失敗は、核の時代において国際の平和と安全のための集团的システムをつくり出すのに失敗するのとまさに同程度に深刻で大きな打撃を与えるものとなる。

☆ ☆ ☆

今日、つい少し前まで非現実的な理想としか考えられていなかった問題においてさえも、国際協力は不可欠と見られている。社会的及び経済的開発において、国際連合のプログラムや諸機関による業績はあまねく認められている。必要性という力が、国家思想の相異を超えて各国政府が共同行動

を取らなければならないところのすべての分野において、国際連合システムをして助言と援助、協力と調停の世界的な源泉としたのである。

私たちが協調的国際主義がなくてはならないことが明白な歴史的過程を迎えている時に、少なくともある局面においてむしろそこから退行するようなことがあるとしたら、これほどの皮肉はない。世界の政治及び経済により素晴らしい秩序を構築すべく努力している国際機関に対して疑問が広がり、なかでも国際連合は厳しい批判の対象となっている。私たちはこうした現象を検討し、理解するよう努めることが必要である。まさにことしの国連創設40周年は、この問題やそれに対処する加盟国の役割について、共に考える好機である。

国際連合を加盟国が満足いくように機能させることの難しさが、ある政府の国際連合に対する態度と大きく関係しているということについては疑問の余地がない。加盟国が増加して複雑さが増し、新しい投票パターンが現われ、分裂と争いのおかげで多くの面で可能な合意と共通の利益が犠牲にされるケースも、影響している。こうした状況において、国際連合を新たな地球社会の問題に対処する協調の道具としてよりも、むしろ現在の問題と混乱のいけにえにし、国際的な権威と責任の欠如の象徴としてみようとする傾向がある。

国際連合に対する批判の多くを不可避免的に受けてたつのは、国際連合の主要機関である総会である。国際社会のその多様性の全貌が見えるのは、わずかに総会の場においてであり、相異と紛争とが特にドラマチックに浮き彫りにされるのも、総会である。総会は、いわば史上初の世界の町会と呼べるものである。ところが総会が国際法や国際的行動基準を法制化し、重大問題に焦点を当て、関心を集めるなど、総会の枠内で行ってきた苦勞のあげくの仕事についてはあまりにも知られていない。

総会を改革し、その進行を能率的に合理化するために、永年多くの努力が払われてきた。だが総会は加盟国の普遍性を代表し、非常に広範かつ多様な議題を取り扱うというのが真相だけに、その大切な要点をもらすことなく、総会の能率化をはかるのは難作業である。とはいえ、総会の活動を大幅に改善しうる方法は確実に存在する。

私は、総会での政治活動の改善を推進するための基本的な措置として、各総会前の政府間協議をもっと密にする一方、重要問題についてコンセンサスを生み出す努力とともに、分裂の原因になるような演説を避けるための確固たる試みを含むようにすべきだと考える。さもないと総会における政治的活動の質が低下しよう。

☆ ☆ ☆

事務総長の機能に固有な、あるいは事務総長に委任されている責任と義務は、極めて挑戦に富んだものである。国連創設後の最初の40年間に、事務総長ならびに事務局の機能は著しく進歩した。そのどちらもその仕事は独立した中立的国際的業務である。

私は、事務総長の地位の変化及び国際機関の全般的な発展とその関連について、一点だけ指摘したい。事務総長に寄せられる協力と理解、それに信頼に対しては大いに感謝しているが、ある場合においては、事務総長へ責任を委任することにより、国連憲章で各加盟国に期待した努力を小さな物にしてしまう結果になっていることを折に触れて懸念する。これでは政治機関としての国際連合の効果的発展にとって支障となろう。

そうは言いつつも、私は、もし事務総長の第三者として仕える客観的な立場での能力がさらに拡大されるならば、総じて国際連合のためになるものと信じる。もちろん静かなる外交は意義あることだが、時にもっと多くが要求されることもある。私はとりわけ実情調査と監視任務をもっと広範かつ早期に活用することを考えている。私はまた安全保障理事会と事務総長と一緒に取り組むべき任務である国際の平和と安全とをめぐる世界の情勢について、もっと定期的かつ組織的に調査することの必要をも考えている。たとえ世界一のレーダーと言えども、それが周辺空域を体系的に監視しなければ、信頼できるものとはならず、その効果はない。私は同じことが国際平和を維持する任務についても言えると思う。

国際的公務の基本的要件、つまり国家圧力からの独立、効率、有能さ及び誠実さは、国連事務局の変わらぬ基本信条でなければならない。これらがいかに大事であるかは、永年にわたって実証されてきたが、重大な事態や紛糾した状況においては特にそうであった。事務局は、国際連合の増大

するニーズを遂行するのに必要な信頼すべき機関である努力を絶えずしなければならない。

しかしながら私は、国際的公務に求められる効率と誠実さの水準を達成するためには、いかなる政策と方法とが最善かという問題に関心がある。優に百を越える加盟国出身の職員を使うシステムを発展させることは、容易な仕事ではない。私たちがあらゆる場合に事務局として正しい理解、正しい規則あるいは最も効率的な組織を見い出してきたかという点については、私は確かに満足していない。私は既存の国際連合の行政、人事ならびに予算上の業務を改善すべく努力することに賛成である。だが、その最高の成果は国連憲章第15章にうたわれている事務総長の権限の範ちゅうにおいて達成されるし、またそうあるべきだと考える。これは国際連合全体の適切な運営と利益のいずれにとっても欠かせないことである。

私は、国際連合の資源をもっとも効率的な方法で活用するために、事務局があらゆる方法を模索し、女性に同等な役割を与えることの必要性を再三強調してきた。私は事務局の運営を改善するための一連の対策を手がけてきたが、これは継続的なベースで追求すべき過程である。変革の時代においては、プログラムと機構とを絶えず検討、再評価し、必要とされる改革を手がけることが、特に大切である。

今後2カ年間の計画予算案を準備するのにあたり、私は全加盟国に対して可能な限り効率的予算で事務局に付託されたプログラムを実施する努力を確約出来るよう努めてきた。だが、私は、自国に正当に割り当てられた分担金の支払いを問題によって差し控えるという一部の加盟国にみられる行為に対しては、深い懸念を表明しなければならない。こうした行為は、国際連合の将来に対して、実に好ましくあらざる影響をもたらすだけである。

☆ ☆ ☆

国際連合の将来について考える時、憲章の冒頭でうたわれている「われら連合国の人民」というその基本的構成者とはほとんど直接的なつながりを持っていないという点で、国際連合は類まれな政治機関と言えよう。加盟国の独立した国家的主権が憲章の最も基本とするものであるために、この点は難しいところである。

とはいっても、国際連合は国際的に重要で国内的にも大きく関係する問題をますます多く取り扱っている。こうした問題に関しては、各加盟国における国民の支持によってのみ、効果的な行動をもたらすのに必要なフォローアップが確実となる。

この場合、幅広いNGOがより積極的に関わることにより、困難な問題の解決も可能となる。これらNGOの直接的貢献や影響力の大きさを、一連の地球的規模の問題に関する会議やアフリカ及びその他の地域で救済活動にたずさわっているボランティア機関、エンタテイナーならびにその他の人びとが行っている目ざましい世界的な努力に見てきた。

私たちはまたこれまで以上に広くかつ組織的な形での実践的国際活動についての理解を広めていくことが必要である。特に若い人々を国際社会の関心事となった問題に直接たずさわらせる方法をもっと工夫すべきである。

私は総会及び安全保障理事会へ提出した他の一連の報告書の中で、国際連合が関係し、その多くで事務総長が特別な責任を持つ主要な政治的問題について詳細に述べている。したがって、ここでは繰り返しを避け、またそうした報告書で網羅されている個別の状況についても言及しないことにする。

しかしながら私は将来に重要な影響を及ぼす今日の他の重要な問題について述べてみたい。恐らくこうした問題のうちで最も広範囲かつ複雑なのは、あらゆる人々に関係する人権問題である。

およそ37年前に採択された世界人権宣言は、国際連合の偉大な業績の一つに数えあげられなければならない。この人権宣言ならびに同宣言から生まれた国際人権規約と条約は、人権に関する世界初の国際的基準を定めたものとなり、各国政府が個人を扱う方法を国際法の定めるところとして規定するものとなった。またこうした条約の順守状況をモニターするために、特別な機関が国際連合によって設けられ、私たちが人権分野において各国政府に対して行っている助言サービスや技術的援助はますます増えている。

だが、私たちはこうした進歩にもかかわらず、個人の権利と自由をめぐる各国政府の取り扱い方については、引き続き監視してゆく必要があることを認めなければならない。大規模な人権侵害が依然として生じており、

しかもそれはしばしば悲劇的な様相を呈している。多くの国がいまだに関連の国際規約を批准しなかったり、国内法を国際連合が設けた国際的基準に合わせてないままである。政治的、宗教的あるいは人種的理由による迫害が続いている。少数民族ならびに先住民族の保護については、しばしば不十分である。また国連及び国連機関に対する各国政府の協力のあり方にも多大な改善の余地が残されている例もある。

ことしの40周年に世界人権宣言ならびに国際人権宣言の全面的適用を実現するために、共同でも、個々別々にも努力してゆく決意を新たにしよう。そのために、私はいまだ人権規約を批准していない国に対して、それを批准するよう要請する。また私はすべての国に対して、人権侵害を調べ、人権を保証するために設けられた制度を支持し、強化し、そして参加するよう要請する。

人権問題で特に重大なのは、人種的差別であり、これはいかなる形であろうとも私たちの社会においては許されず、最も危険な社会的、政治的悪の一つである。この特殊で極端な例の一つが南アフリカのアパルトヘイト（人種隔離）政策で、南ア政府が時宜にかなった改善措置を講じようとしなかったために、今日、陰悪かつ暴力的な事態が生じており、これに関して安全保障理事会も最近、問題に取り上げた。このいまわしいアパルトヘイト体制並びにそれによって生じている多くの人々の悲劇に対し、私がいかに強い反対の意を抱いているかは、繰り返すまでもない。私は、かなり遅くなったとはいえ、最悪の事態を回避するために適切な措置を講じ、当事者間の接触がはかられるよう望む。アパルトヘイトと並んで、国際連合の主導で進められているナミビア独立計画の失敗が、南部アフリカの緊張と苦悩の根本的理由の一つであるということを、私はここで付け加えておかざるを得ない。

深刻化している社会的犯罪の一つに、麻薬の問題がある。麻薬のために数限りない人びとの生活が破綻し、政府の統合性と安定性が損なわれさえしている。麻薬の乱用と不法な取引は法外な利益をもたらすために、今日、世界の多くの地域において非常事態にまで達している。各国政府の一層の努力にもかかわらず、この問題は深刻の度を加えており、この新たなる挑

戦に対処すべく効果的な戦略を開発するために、国際的な態勢の調整にもっと注意が払われなければならない。麻薬問題がもはや単に社会的で多分に国内的な問題とみなせないことは、明らかである。

私が麻薬の乱用と不法な取引のあらゆる側面に対処するために、初の世界会議を開催するよう提案しているのは、こうした背景からである。私はこの種の会議は行動指向的であり、エスカレートする一方の麻薬の問題に対する世界の意識レベルを高め、国連システムのすべての潜在的能力を動員するのに役立ち、国際、地域そして国内の各レベルにおける行動計画を生み出すものでなくてはならないと思う。いま国際社会にとって、この重大な危険性と取り組むための努力を強化する時が来ている。

テロ行為は今日、実質的に地球上のあらゆる地域に広まっている。テロ行為は自暴自棄な人たちがわが身への危険性をかえりみずに国内法及び国際法を平気で犯す行為を含むので、その対策は特に難しい。私がこれまでに再三指摘してきたことだが、この問題のもっとも悲劇的な側面は、ますます多くの罪のない市民の生命が失われてゆくことである。先述したように、必要な国際的法手段として利用出来るものもあり、各国政府が共に努力して、それを実践する時がきている。こうした状況下、国際協力をさらに推進するためにいかなる効果的な方策を取り得るかについて検討することを望む政府もあるだろう。

共通した大きな問題に対して国際社会が一致して反応する際、社会的ならびに政治的連帯と相互信頼をつくり始めるべき時が来ていると思う。それが結果的には、より伝統的な政治問題の分野においても十分に役立つことになる。こうした反応の好ましい例は現に存在するので、そのいくつかについて簡単にふれてみよう。

- 難民救済並びにこの人たちの自発的帰国または再定住のための国際的努力は、国際的団結を示す代表的な実例といえる。
- すべての国に適正な食糧の安全保障をもたらすために取られた措置によって、世界の飢餓追放の闘いが前進した。
- 1990年までに世界のすべての子供に免疫を与えるキャンペーンは、最後の努力をする意志さえあれば、実現可能のようだ。私は世界の指導

者に対して、無数の若い生命を救うためのこの重要かつ全世界的な取り組みを全面的に支援するよう要請する。

こういう分野やその他においても、世界を統治するに当たって国際協力が不可欠な要因となるにつれて、可能性の範囲は着実に広がった。

もう一つの重要な例として、国連婦人の10年世界会議があげられよう。この会議は国連婦人の10年の成果について検討するためにナイロビで開催されたが、期待以上の成功を収め、喜ばしいことには将来に向けての一連の重要な提案を全会一致をもって採択した。明らかに、この問題の重要性が最優先に扱われたのである。

このダイナミックかつ広範な代表者からなる会議の意義ならびに影響について十分に判断することは、いまは困難である。だが一つだけは確かである。つまり人間活動のあらゆる面において、人類の全歴史を通してこれまであいまいにされ、抑圧されてきた女性の完全かつ平等な参加は、ナイロビ会議をフォローアップするさまざまな実践的努力によって止めることの出来ないはずみをもたらす重要性和活力を持つようになった。私はまたそれによって世界の政治思考及び行動に新たに健全な局面が開かれることをも望む。

私は人間の災害に対する国際的な反応については、先にも述べた。今日でこそアフリカ大陸は私たちの最も重要な関心を集めているが、干ばつでアフリカ数カ国が危機に見舞われているとの警告に対して、当初国際社会の反応は遅かった。何万もの人びとにとって、その反応は遅すぎえした。

しかし史上最も広範囲かつひどい干ばつの被害をこうむっている3,000万のアフリカ人の大多数にとって、被災国政府と国際社会との間に育まれたユニークな協力関係は、生命と希望をもたらした。この協力関係によって、前代未聞の様相をおびた災害が食い止められ、実に数百万もの生命が救われた。この国際的な人道的協力のきわだった例においては、国際連合は中心的な——実のところ不可欠ともいえる——役割をになってきたが、今後も引き続きさまざまな方法で中心的役割を演じよう。

いまだ何百万ものアフリカの人びとが、困難かつ定かでない未来を背負っているが、その未来も、アフリカの緊急事態に呼応して生まれた協力関係

がこれからの最も重要な復興期間を通して維持されるならば、もっと希望に満ちたものとなるだろう。私たちは、こうした悲劇の再発を防ぎ、その根本原因に対処すべく持続的な開発援助プログラムを策定し、実行する準備をしなければならない。

この40年間の歩みにおいて、私たちは多くのことを経験した。勇気づけられるものもあったし、いらだたしいものもあったが、いずれにせよその経験の多くは実に啓発的であった。私たちは多くの仕事に取り組んだが、手に余るものもあった。未来を展望して、どの活動が本当に有益で、どの仕事がなくともすむものかを決めていくのではないか。

私たちは、自らを破壊する手段をつくり出し、効果的に平和を守り、この地球上のすべての人びとのためになるようなシステムを築くためには、意志と知恵とをもって大いに努力することが必要となることを忘れてはならない。未来に対しては、災難が待つものとしてではなく、機会に満ちたものとしてのぞもう。私たちは、人間として共有するすべてのもの、人間が創造したすべての知力、そして現代世界のすべての素晴らしい多様性を忘れないようにしよう。

特にこの機会に、国際連合を、その創設者がそうであったように、単に不幸な過去の重荷を引きずるものとしてではなく、現実的な未来への希望としてみることにしよう。私たちは自分たちが直面している困難や危険について、現実的な認識を持たなければならない。しかし同時に、力を合わせればそれらを乗り越える方法を見出せるのだという決意も固めよう。



国連事務総長

ハビエル・ペレス・デクエヤル

1985年9月3日

1985年10月

国際連合広報センター

東京都港区南青山1-1-1 新青山ビル西館22階

〒107 電話 (03) 475-1611 / 4